（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	北澤　直宏
論文題目	ベトナムにおける新宗教の研究 ―カオダイ教から見る20世紀の政教関係―		

（論文内容の要旨）

本論文は、カオダイ教団の事例から、脱植民地化後のベトナムにおける政教関係の変遷を明らかにするものである。分断国家の成立から南北統一、さらにはドイモイと呼ばれる改革開放政策の導入に至るまでのベトナム史を、カオダイ教団との関係に着目しながら編年体で記述することが本論文では試みられている。

序章では、カオダイ教研究とベトナム史研究の双方における先行研究の問題点が指摘される。1926年にベトナム南部で設立された新宗教としてのカオダイ教史に関する実証的な研究は存在してこなかった。またベトナム南部の歴史は現在の社会主義政権下における公定史観のもとで十分な言及がなされぬまま今日に至っている。これに対し本論文では、カオダイ教団と国家権力との関係の変遷を一次史料に基づいて明らかにすることで、いま述べた問題点を乗り越えることが提案される。

第一章では、南ベトナムの第一期共和政期（1955-1963）における、ゴー・ディン・ジェム政権とカオダイ教団との関係が論じられる。南ベトナムの初代大統領であるジェムの執政期には、彼自身がカトリックであったために他の宗教団体に対する迫害が行われたと一般には語られている。しかし実際には、彼が行おうとしていたのは政教分離の徹底であるにすぎず、宗教団体が政治から撤退する限りにおいては、その教義内容に干渉することなく活動が保証されていた。

第二章では、軍事クーデタによるジェム政権の打倒後に成立した不安定な軍事政権期（1963-1967）がとりあげられる。この時期は宗教政策が不在であり、公的領域における宗教団体の既得権が無原則に復活していくことになった。これに対しカオダイ教団内では、指導層の一部が国家権力との癒着を背景に勢力の拡大を図り、対抗関係にある各派閥が自派に都合のよい神託を乱発したために内紛が激化していく。

第三章では、グエン・ヴァン・ティエウ政権による第二共和政期（1967-1975）の政教関係が論じられる。ベトナム共和国の消滅が現実味を帯びていく時期にあたり、宗教団体からの要求のエスカレートに対し、共産勢力による煽動をおそれる政府は譲歩を重ね、このことが国家の体力を徐々に奪っていった。

第四章では、1975年から現在に至る社会主義政権下での政教関係がとりあげられる。社会主義政権によるベトナム統一の当初は、宗教そのものを敵視する政策が採用されていたが、近年では宗教活動を合法化し、国家権力による統制を確保する政策へ

と転換されている。カオダイ教の場合も、政府は取り込みに方針を転じ、合法化と引き換えに組織面・人事面での政府の発言力を強め、カオダイ教団を政府の社会事業を補完する翼賛団体に改造する試みを進めている。

終章では、本論文の考察を通じて明らかになった、ベトナム政教関係史およびカオダイ教団史の特徴が整理されている。現代ベトナムの政教関係に一貫するのは、政府による宗教団体への干渉が常に政教分離の達成を金科玉条として行われ続けてきたという点である。その一方でカオダイ教団は、本質的に親政府的な団体ということができる。本論文全体の考察からは、南ベトナム政府は宗教団体を迫害したために民衆の支持を失ったという定型化した語り口や、国家への抵抗を貫いて民衆の革命を先導してきたカオダイ教団というステレオタイプ的な理解には修正が必要であるという提言が最後に示されている。